九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

川村湊著『海を渡った日本語 : 植民地の「国語」の時間』

中里見, 敬
東北大学 : 助教授 : 中国語・中国文学

https://hdl.handle.net/2324/6471

出版情報：日中友好新聞. 1785, 1997-09-05. 日本中国友好協会
バージョン：
権利関係：

8.3.(6)

中国語・中国文学 わたしのすすめる本 ⑥⓪

川村　湊著

『海を渡った日本語――植民地の「国語」』　中里美　敬

この本は、50年ほど前まで、日本が台湾・朝鮮・満州・フィリピン・シンガポール・南洋群島・そして北海道・樺太などで行ってきた、植民地政策の一環としての日本語教育のありさまを描き出したものである。本書に登場する、中島敦・佐藤春夫・井伏鱒二・石川達三などの作家たち、中島健蔵・福田恆存などの評論家たち、柳田国男・時枝誠記・保科孝一・三木清などの学者たち、そのそうそうたる顔ぶれを見ても、いわゆる文化人が言語問題をとおしていかに深く植民地政策に関与したかをうかがい知ることができる。また、これらの地で使われた日本語教科書や、日本語を学ばされた児童の作文なども引用されており、日本語教育の現場を想像させてくれる。

しかし、本書はたんに日本の植民地統治や日本語政策を批判したり、それに加担した人たちを糾弾するために書かれたわけではない。むしろ、韓国で日本語教師をつとめた経験のある著者は、半世紀以上も昔の植民地において、日本語教育の方法論や理念において「日本語派」と「国語派」という対立が存在した事実を浮かび上がらせている。この対立は、戦後の新仮名づかいと旧仮名づかいの対立に引き継がれ、さらには現在の日本語教育においても「言葉派」と「文化派」の違いとなって再現されている。一方、フィリピンの三木清は、外国人のブロークン・ジャパニーズを日本語の乱れと見るのではなく、日本語と現地語の融合と見て、クレオールの可能性を語ったという。また、広東語と福建語と英語とマレー語を話すシンガポールの事例から、言語＝文化＝民族を三位一体のものと考える日本の特殊性を著者は指摘する。

このように日本による被占領地域を舞台とした日本語をめぐる様ざまな問題は、実は外国人と接する機会が格段に増え、日本語の「国際化」が云々される現代の私たちのものにほかならない。半世紀以上も前に「外地」の日本語教育の現場で問題になっていたことが、今では外国人の隣人をもつことがあたりまえになった私たち一人一人に与えられた問題へと一般化しているのである。

旧植民地における日本人の文学活動について数多くの著書を発表している著者・川村湊氏は、近年欧米で盛んなポスト・コロニアリズム、オリエンタリズム、多言語主義といった批評理論の成果をふまえて、日本と近隣諸国の関係・歴史のとらえなおしを行っている。本書で中国に直接関わる記述は台湾や満州など一部の章にすぎないが、本書の視点は私たちの日本語観と中国人に対する接し方に根本から再考を迫るものだといえよう。

私たちが鋭く問われているのは、個々人の善意にもかかわらず、人と人、異言語・異文化が交流するときに不可避な摩擦と衝突を直視すること、そしてそれに対処していく能力である。このことは戦後処理や歴史認識でなく、私たち一人一人の日常レベルでこそ問われているのだ。

だけ

青土社刊　1994年　2330円（本体価格）

（東北大学助教授、中国語・中国文学）